

「記号論」以後の物語理論

岩松, 正洋

<https://doi.org/10.15017/10018>

出版情報 : Stella. 18, pp.233-238, 1999-06-10. Société de Langue et Littérature Françaises de l' Université du Kyushu

バージョン :

権利関係 :



「記号論」以後の物語理論

岩 松 正 洋

言語学的モデルに依拠して物語の理論を構築しようという傾向は、プロップ、バルトからブレモンを経てアメリカの文学理論家たちにまで広く見られる特徴だった。物語の理論、物語の詩学というと、即座に記号論に結びつけられていた時期があったくらいだ。グレマスやバリ派の記号学者たちの活躍のせいもあるが、初期ドロフやジュネットらの業績が、誤解から必要以上に「記号論」との関連で取り沙汰されていた観もある。そして「文学の形式研究にたいして増大しつつある不満や、物語論の危機という最近の風評」の基盤になっているのも、この種の誤解のほずなのだ。早くも（ようやく？）1991年にマリ＝ロール・ライアンが書いているとおりの——

形式研究や物語論はもうおしまいだよ、という風評はひどく大げさな物言いだ。とはいうものの、過去20年間、形式研究や物語論の存在理由であった金鉱からもうなにも出てこないというのは、否定できない事実なのだ。やれ視点だの物語技法だのといったお約束の話題は、もうすっかりやり尽くされてしまった。記号論四辺形とか生成文法とかいうお手本モデルも、テキストの意味を普遍的・科学的に説明してみせると約束しておいて、その約束を守ったためしはない。[RYAN, 3]

1960年代にクリステヴァが試みて放棄した「物語の生成文法モデル」に、1980年代になってジェラルド・プリンスが新たに挑戦して、ほとんど同じ袋小路に踏みこんでしまうのを見ると、言語学モデルへの夢にはほとんど悲惨なものすら感じる。それでは暗に明に反・物語論的な姿勢を見せる論者の立脚点はどうかということ、イェール学派経由の脱構築を旗印とする批評（荒木正道『ホモ・テクステュアリス』、法政大学出版局）の拠って立つところが、人文主義を標榜する印象批評（原孝一郎『幻想の誕生』、柏書房）と結局のところあまり変わらないのではないかと、思わされてしまうのである。

物語の理論には「記号論」以後が求められていたのだし、じっさいにそれはこの10年以上にわたって試みられてきた。「記号論」以後、と括弧に入れて表記するのは、もちろん記号論そのものが終わっていないからだ。物語理論と「記号論」的発想とのいわば蜜月以後、といった意味合いでの以後なのである。「物語理論 narrative theory」という語で、「物語論 narratology」よりも広い範囲を指し示すことにしよう。

文学理論の概説書を見ると、記号論や構造主義の項目のあとに、ポスト構造主義や脱構築といった項目が並んでいる。だから「記号論」以後の物語理論と言ったときに、ではポスト構造主義の、あるいは脱構築の物語理論か、と思われるかもしれない。しかし「脱構築」という題目は「詩学」と矛盾することが多く、そもそも「ポスト」を標榜したがる立場にとって物語理論（とくに物語論）が恰好の「標的」である以上、実り多い結びつきを期待することは容易なことではない。

そういった状況にあって、アンドリュー・ギブソンの『物語のポストモダン理論に向けて』がひときわ目につく。この本は「ポスト」好みの黙示録的な撞着語法を排し、小説や映画だけでなく、ルーカスアーツなどの、コンピュータを活用したインタラクティブ・フィクション（IF）をも視野に収めようとしている[GIBSON, 275-278]。ジュネットからライアン（後述）に到る物語理論のモデル作りが幾何学的であることを指摘し、熱力学的「強度」を掬いとれるような物語理論を構築する方向を探ろうというもので、ドゥルーズやデリダの発想を愚直すぎない程度に応用しようと試みている。とりわけ最終章「物語と怪物性」の第3節「《仮想リアリズム》、サイバーフェミニズム」と第4節「怪物性の美学——ベケット3部作」にかけて[254-273]、語る行為を成立させるある種の不均衡・歪みを洗い出そうとするあたりは、きわめて示唆に富んでいるといえよう。ここでは「怪物性」を軸に、たとえば映画では、『プレデター』『エルム街の悪夢』『エイリアン』『イレイザーヘッド』『ターミネーターⅡ』だけでなく『鉄男2——Body Hammer』『アップルシード』などの日本産SFをも視野に入れて論を展開している。これを見てもわかるとおり、旧来の文化研究(cultural studies)に物語理論を接木したようなところがあって、そこがこの著作の危ういところでもある。文化研究やイデオロギー批評にしばしば見られる状況還元主義をこの方法で乗り越えられるという保証はない。

むしろポストモダンを旗印にしない著作のほうに、物語理論の言語学一辺倒を修正しようとする強い覚悟が感じられるといえば意外だろうか。物語を「テキスト」の問題としてよりも「認知」の問題としてとりあげようというさまざまな試みがそれである。じつはこのようなスタンスは、早くもトドロフの『デカメロンの文法』やジュネットの『物語のディスクール』のような物語論の古典に胚胎しているし、エーコの『物語における読者』やリクールの『時間と物語』においてすでにその開花を見ることができるといえる。また1970年代以降、認知科学の分野で盛んに研究されてきた読解行為の科学的分析の成果は、TEXTIMAグループのギ・デニエールとセルジュ・ボーデとの共著『読み・テキスト理解・認知科学』のなかで、文学研究にも応用できる形に整えられはじめている。ともすると物語の諸問題を文法の問題に帰着させてしまいがちな旧来の「テキスト言語学」や、社会史とか解釈学からモデルを借りる傾向をもつ「読みの理論」（コンスタンツ学派やフィッシュ）にかかわって、物語の生成・読解の前提を「認知」の側面から解明しようという試みがなされてきているのである。さらに1990年代のジュネットは、『フィクションとディクション』から「テキストから作品へ」（『フィギュールIV』所収）にかけて、「美学」「文芸学 Literaturwissenschaft」への大接近を見せた。こういった動きは、心理学・哲学・言語学・人工知能研究を巻きこんだ認知科学の発展や、言語学の分野におけるジル・フォコニエのメンタルスペース理論の登場と不可避的に対応しているにちがいない。

1980年代半ばから徐々に盛んになってきたこのような研究はいずれも「正統派構造主義によって異端の烙印を押されていた […] 問い」[RYAN, 3]を問うことからはじまっている。そのうち最大の問題が「虚実」という問題であろう。虚実関係の諸問題は、文学理論ではなく、もっぱらラッセルからデイヴィッド・ルイスにいたる言語哲学の領域に属するとされていたが、平行世界SFや歴史記述メタフィクション、とくにフエンテスやカルペンティエルの歴史改変小説の登場によって、「虚構とはなにか、は文学研究の問題ではない」などという不文律は一挙に顕在化し、同時に無効となってしまった。虚構物語テキストのシニフィアン（物語言説）とシニフィエ（物語内容）だけを考えていればよかった時代は終わり、発話行為（物語行為）を勘案すること（1970年代にジュネットやシュミット、プラット、エーコが試みはじめた）、および

物語の指示対象を意味論的に指定すること（1980年代にパヴェルやライアンが着手した）が必要となってきたのである。本稿後半ではパヴェル、ライアンおよびフルーデニックの著作をとりあげ、物語理論が言語偏重主義や状況還元主義やポストモダン風味のソフィズムをどう回避しているかを見ていくことにしよう。

パリで言語学の博士号を取り、北米で教鞭を執り、3つの言語で著述し、フランス語で小説も書くルーマニア人トマス・G・パヴェルの『虚構の世界』は、厳密には物語理論というより虚構論であり、文学理論の領域で虚構/非虚構の区分を立てようとした、最初のもっとも著作である。アリストテレス詩学の「歴史家は起こったことを語り、詩人は起こりえることを語る」のテーゼを、クリプキの様相論理モデルとウォルトンの「ごっこ遊び」理論とを援用して読み替え、形式意味論や神学的隠喩を駆使して精緻なモデルを描きつつ、虚構世界のもつパラドキシカルな性質を明らかにしてゆくのだが、その着地点はしばしばデリダの、あるいはグッドマンの言語観と共鳴しあうような「虚構」モデルなのである。かつての言語行為論が虚構言語を「例外」として研究対象からいったん排除してしまったのにたいして、パヴェルの理論では、虚構言語の性質を冷静に分析することによって非虚構言語（あるいは日常言語）の置かれている状況が照射されてくる。これはコンスタンツ派の読みの理論と『世界制作の方法』、サールとデリダ、といった対立しあう諸発想を止揚する試みと言うべきであろう。とりわけ、テキスト外の情報がテキスト世界に与える意味について論じた箇所 [PAVEL, 127] は興味ぶかい。

マリ＝ロール・ライアンはジャン・ルッセ門下の詩学者・言語学者・独仏文学者であり、仏英両語で執筆する合衆国在住のスイス人ソフトウェアコンサルタントでもある。この経歴が彼女の『可能世界・人工知能・物語理論』（水声社より拙訳で近刊）の精緻さと柔軟さを物語るだろう。ライアンもパヴェル同様、クリプキの可能世界論とウォルトンの「ごっこ遊び」理論とを縋いあわせるが、その方法がどんな帰結をもたらすかについて、もっと徹底して追究している。その結果、絵画にとって虚構とはなにか、とか、出来合いの挨拶が印刷された市販のグリーティングカードを出したばあい、それは虚構とどういう共通点をもつか、などといった、興味ぶかく厄介で、ある意味において「問いそのものに淫する」とでも言いたくなるようなスコラの諸問題が浮上してく

る。文学理論が等閑視してきたそれらの諸問題を愚直に考究しているうちに、日常言語も虚構言語に劣らず「ごっこ遊び make-believe」のゲームとして成り立っている、という観点があらわれてくるのである。

ライアの著作の後半は、物語の筋の研究に当てられている。プロップからバルトに到る要素還元主義的「筋」研究、物語における非実際事象の地位を勘案したトドロフやブレモンの「筋」研究では、「筋」といえば純粹に物語内容の問題としてとらえられていたが、ライアは、物語の諸階層（第1次、第2次……第n次物語言説）の相互作用をも「筋」の問題としてとらえている。筋が物語の構成の問題としてとらえられ、物語内容と物語言説との双方にまたがる問題圏となっているのが、ライアの筋理論の画期的なところだ。なお、筋の生成変形文法型形式表示がなぜ失敗に終わらざるをえないかについては、精密な検討のうえ論証されている。

フライブルク大学英文学教授のモニカ・フルーデニクは、『言語の虚構と虚構の言語』について上梓した『「自然」物語論にむけて』で、物語理論の抜本的再編成を提案した（すでに挙げたパヴェルとライアの著作が虚構論であったのにたいして、フルーデニクの著作は物語論である）。彼女も認知科学・人工知能研究の成果を応用しているが、さらに大きな影響を受けたのが社会言語学、とりわけ談話分析の方法である。『物語の構造』のフランツ・K・シュタンツェルの門下としてはジュネット流の「物語」観を批判するのは当然だが、シュタンツェルの体系にたいしても修正を要求することになる。

『「自然」物語論にむけて』の最大の特徴は、「物語」の定義に変更を求めたところだ。従来の物語論において、物語を物語たらしめているのは「媒介性（語り手の存在）」と「筋（事象＝できごとの存在）」だった。パヴェルのように戯曲の「物語的統辞」を云々することによって暗に「語り手」の存在を必須ならざるものとする立場もあったが、事象の存在を必須と認めない物語理論はなかったといってもいい。いっぽうフルーデニクは「体験する意識」「経験性」を物語性の必須条件と見なし、事象は必ずしも必要とされない、と論じる。その結果、たとえば「物語」と「記述」とを素朴に截然と区別するチャトマンらの米国流「古典」物語論に部分的な見直しを迫ることになる。またフルーデニクはリクールの「ミメシス I, II, III」を想起させる「物語の認知階層」[FLUDERNIK, 43]を想定しているが、リクールとは正反対に、「経験

性」の欠如をもって純粋な歴史記述を物語の領域から排除している。

フルーデニックの理論のもうひとつの特徴は、従来の物語論が例外として排除したり、他の規範的物語類型の変奏と見なしたりしてきた特殊な物語形態について、個別に分析し位置づけているところだ。すなわち2人称代名詞、1人称複数形の主語人称代名詞（彼女は挙げていないが、バルガス・リョサの「小犬たち」やクリストフの『悪童日記』を想起されたい）、不定代名詞 *on* や *man*、フェミニズム小説における自作の代名詞、現在形・未来系・条件法・不定法のみテキスト、時制矛盾（マイケル・フレインの『極私生活』における「Once upon a time there will be ...」）などである。また彼女は、従来の物語論が民話や近代小説の分析に偏っていた点を批判し、私的体験談や笑話、中世英国の聖人譚といったものを取り上げることによって、新しい問題圏を発掘している。

物語理論が整備されるにつれて、その精緻さが研究対象を制限してしまうという皮肉な事情が出てきた。本稿の冒頭で触れた物語論への批判は、そういう事情に端を発していたのかもしれない。本稿で取り上げた4つの著作は、その批判に応えようとする試みである。そのうちライアンとフルーデニックのものはリアリズム以後の小説を論じるのに適しており、これは従来の物語理論からの一步前進と認められよう。とはいうものの、1990年代にはいつかのジュネットの業績を読んでから改めて『物語のディスクール』正・続を読み返すならば、少なくとも彼の著作には、研究対象をア priori に制限させるような側面がなかったことが明らかになるはずである。ジュネットは「古典」物語論の完成者にして破壊者なのである。

《参考文献》

- FLUDERNIK, Monika: *Towards a 'Natural' Narratology*, London / New York: Routledge, 1996.
- GIBSON, Andrew: *Towards a Postmodern Theory of Narrative*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 1996.
- PAVEL, Thomas G.: *Univers de la fiction* [1986], version française par l'auteur, Paris: Éd. du Seuil, coll. «Poétique», 1988.
- RYAN, Marie-Laure: *Possible Worlds, Artificial Intelligence, and Narrative Theory*, Bloomington / Indianapolis: Indiana University Press, 1991.